

花の色は移りにけりな

西松布咏

たより『美紗の会』
ニュース 第36号

平成十三年四月十六日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保朋子

豊穣な「闇」の楽しみ
十一月十一日

時雨降る夜の逢うは別れ

ヤリタミサコ

新世紀もまたたく間に過ぎてゆき、桜の花びらが、はら／＼と舞う季節になってしまった。花も雪も払えば清き袂かなほんに昔のことよ！なんと今年はじめての「たより」でございます。遅ればせながら過ぎし日を返りみますと、私の唄は「ゆき」で始まりました。一月二十日大阪泉の森ホールでの「ふれあいマルチ蔵コンサート」に出演の為、早朝飛行機で向かうはずが絶え間なく降る雪の為欠航！

新幹線に乗っても間に合はず、やむなく日程を変更しての公演となりました。幸いお客様が、来て下さり、想い出に残る温かい触れ合いを感じ、新幹線で大浦を過ぎると、一月十八日の新潟大湯温泉での「雪と邦楽と懐石の会」の雪の出逢いは格別でした。上越新幹線で大浦を過ぎると、一面の雪景色で川端康成の「トンネルを過ぎると雪国であつた」の冒頭の一ページが目に広がりました。

まだ三十代の若夫婦が、代

を継いで古い旅館のイメージをどう刷新してゆくかを摸索しての企画、友家ホテル五十年記念イベント。ほんやりとライトアップされた川ぞいの雪景色を背景に、江戸情緒を出ししながら雪を織り込んだ唄を、ぱつり／＼と話しながら唄わせていただきました。この時の雪は、しだいに夕闇と連れ立つて私の眼を異次元に誘ってくれ、お客様の心に静かに降つてくれたようでした。

桃の節句が過ぎ、梅だよりが風に乗るうららかな日和の三月十一日第二十一回美紗の会が開かれました。お陰様でこのところ大型新人があいつぎ、前回デビューした高野さん、三雲さんが、早くもコンビを組んでの登場となりました。が、自然の前に文明の利器のなんと非力なこと！と「ゆき」の偉大きさを思い知りました。二月の「梅川」いつもながらあでやかで楽しい鈴木さんの「夜桜や」「凜」とした傳田さんの切れ味の良い「あの日から」ドレイソから帰られて間もないのに暗記なさつて大奮闘の河北さんとの「玉川」海外出張の合間にをぬつて参加して下さった山本さんの「待ちわびて」あせらず一步／＼と自ら言い聞かせての山中さんの「宇治茶」この先にどんな桜が咲こうとまよ／＼と、いつも前向きな山根さんの弾き語り。

さすが踊りで鍛えた勘の良さの飛田先生の「山中しぐれ」ブツツリと酒をやめて寅さんから美紗の会のご意見番へと見事な変身ぶりの小高さ

今回の「綱は上意」

今回はじめての男唄「権九郎」を見事に唄いこなした増田さん、すっかりおなじみの情愛を描く踊り、三味線と笛と声で感情の機微を伝える唄、この空間の持つ闇の深さと濃い

人の「綱は上意」

今回はじめての男唄「権九郎」を見事に唄いこなした増田さん、すっかりおなじみの情愛を描く踊り、三味線と笛と声で感情の機微を伝える唄、この空間の持つ闇の深さと濃い

この先にどんな桜が咲こうとまよ／＼と、いつも前向きな山根さんの弾き語り。

さすが踊りで鍛えた勘の良さの飛田先生の「山中しぐれ」ブツツリと酒をやめて寅さんから美紗の会のご意見番へと見事な変身ぶりの小高さ

厚さといつたら。涙も汗も悲嘆も幸福もたっぷり含んだ、マーク・ロスコの一見單純に見える絵のよう。ロスコの暗い青の画面にも、この夜の唄と踊りにも、心の時間と苦しむことがコンデンスされている。田中優子さんが「せつなさ、やるせなさ、あきらめ」の美学というお話をされた。私はこれを不条理の美学、と思う。やべckettのように、不条理つまり、人の世は不条理に満ちていて、それを合理化したり理性的にコントロールしようとすると、そのではなく、カミニュアルの美だ。これは、断念や諦念が必要となつてくる。親より先に子どもを死なせてしまう、恋しあつていてるので結ばれない二人、義理やしがらみに強要されると、行為不慮の病や死、など近松を持ち出すまでもなく、神に怒りをぶつける。他には方法がないことがある。充分に悲しみ、そしてあきらめ、それから現実へソフランディングしていくこと。そのプロセスの美学。

西松布咏さんの唄と花柳千寿文さんの踊りでの端唄三曲は、水を象徴する布・屏風、懷紙・羽織が効果的に使われ、忍ぶ恋やきぬぎぬの別れ、などの場面を生き生きと感じさせる。大劇場での大道具小道具合唱つきのオペラには醸し出されたくない、小宇宙の情念である。シンプルゆえの豊穣さ。

歌詞もまた遊びが隠されていて、音・意味・視覚などの観点からも楽しめる。

次は、田中さんのお話をされ、西松さんの「柳やなぎ」は、女心の切なさと可愛らしさが表現されている。「エイジわるな」「あた腹の立て好きぢやえ」というコトバは、上方唄の「柳やなぎ」は、女心の切なさと可愛らしさが表現されている。「エ

初しぐれ」は寺師美智子さんの笛もあり、花柳さんの踊りがすばらしい。後姿が餓舌に語る、抑えてはいるが深い情念、首の角度や足と腰が表現する内に秘めた心の動き。庄巻は、泉鏡花の現実と幻想の交錯する「歌行燈」。葛西聖司さんの語りが、物語の世界に引き込んでいく。ことばの流れるリズムが心地よい。満月よりも少し欠けた月と川面が見え、四人の人物が立ち上がりてきて、小野里禮子さんの仕舞と小野里修さんの地踊が幻想と現実を溶け合わせていく。田中優子作詞の「幻のお三重」の最後「私の身体は舞いました」が花柳さんの踊りと西松さんの唄のクリアマックスで、ぞくぞくするほどエロスに満ちていた。西松さんの「の」いう喉の音の官能的な響きの快楽。暗いストーリーに三味線のバチから反射する鋭い光が凍つてく川面のよう、行燈に見え隠れする人間存在の不思議さ、夜明けの暗い森での逢瀬、仄暗さと闇と明かりとの交錯する人間関係、イメージが鮮明に表された夜であった。

この道をおいて我を生かす道無し三味線道

伊勢克也

いや、すっかりハマつてしましました。「ハマる」つていう字は「嵌る」って書くのでしょうか? それとも「壙る」ですかね? いずれにせよハマつてしまつてますよ、本当。なんたって三味線ばつかつててるんで、十四年可愛がつてる猫の「ニヤー丸」が病気になつちやつたつてくらいで、今は求道者としての三味線生活を少々。三味線は四畳半の茶の間にある床の間に置いてあつて、ちょっと手をのばせばいつでも稽古ができる。この四畳半の茶の間に床の間つてのが貧乏長家みたいでいいでしょ。あたしん家は築四十数年という木造の借家で、アルミサッシなんて一個も無いのが自慢! 震度三の地震でも震度五の恐怖が味わえる安普請。隙間風だけの風の音の良さが、何故か三味線の音色を良くしてくれれる。チン、シャン、もう気分は明治か大正か。あたしや三味線がぶれの馬鹿旦那。熱しやすくて冷めやすいは親譲りで、でもを始めるにも先ずは格好から袋をあちやんに縫わせ、そり出して着付けの練習。白足袋に鹿革の鼻緒の雪駄。踵がはずれてくる間にひっかけられるのが粹つてことで、近所で歩く練習までしちゃつたら、隣の奥さんが「伊勢さんとこ、またなんか始めたよ…」ってあきれた顔。弟子なんだからつて頭も丸めちまつて、こうなつたらもう時代錯誤の変な人。朝は自転車で二十分「えんかいな」を二回繰り返したくらいで、勤務先の大学に到着。研究室ではSalk Soulにあわせ地唄を唄り。夜は一杯やりながら、習つた順に「お江

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。頭も丸めちまつて、ようやく練習までしちゃつたら、隣の奥さんが「伊勢さんとこ、またなんか始めたよ…」つて

新学期は八月初旬に始まつているので、十月は三ヶ月めになるが、数センチもある教科書はすでに百・三十頁まで進んでる。これは宿題が多いからである。従つて、授業後の私の仕事は宿題の採点である。解放されるのは午後三時・四時となる。一年生三分之一からである。従つて、授業も全然上手くいかない上に、氣が付くと三味線抱いて寝てる。あまりに上手くなつてお師匠もビックリつて夢を見て泣いてしまう。「おほえかたして、しょがないわね!」なんて言われて悲しくなつたりして。

嗚呼、陥しきかな三味線道。

アメリカ便り

その一

「ローバード立大学 日本語教室にて」

嘉本範男

一千零十月初旬 Eddy Hall 九号教室朝九時 Mako Beeklen 先生の元気な声「お早よう」
ざいます。学生「お早よう」
先生「Broset わん わん」のうは
何をしましたか。」
Broset「音楽を聞いてテレビを見ました。」
先生「DeWitt わん キのうは
何時になりましたか。」
DeWitt「…お…お…十一時
に寝ました。あさ〜七時に
起きました。」
先生「McGillivray サン、DeWitt
さんは何時間寝ましたか。」
DeWitt「…十一時半です。」
先生「DeWitt わん、きのうは
も授業が始まる。」
先生「Today we welcome new
visiting instructor from Tokyo.
Please give to us your brief introduction.」
嘉本・墨板に嘉本範男と漢字を書く。Kamo Norioです。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。頭も丸めちまつて、ようやく練習までしちゃつたら、隣の奥さんが「伊勢さんとこ、またなんか始めたよ…」つてあきれた顔。弟子なんだからつて頭も丸めちまつて、こうなつたらもう時代錯誤の変な人。朝は自転車で二十分「えんかいな」を二回繰り返したくらいで、勤務先の大学に到着。研究室ではSalk Soulにあわせ地唄を唄り。夜は一杯やりながら、習つた順に「お江

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。

編集後記

戸日本橋」「からかさ」「有明」「棚のだるま」「木遣りくずし」「えんかいな」を繰り返しているうちに酔いがまわつてきて、「お江戸日本橋くずし」や「棚のだるまくずし」になっちゃつて、そのころには「こりや天才かもしれない」と思つたりして、気が付くと三味線抱いて寝てる。